

玉池雜藻

完

5
1109
1



利
門
1.109
卷



筑波山端の志は山り事なき隨筆の書巻
むらりしと重き物とて田井のうこそうと好く限里
志らぬゆゑに爰に老師とてい集めをこの
まうと雅とて俗とて詭諧の材となす
おまは談小風小影小呼とて考ふるは海内聞者
多く岳に登りて招けり臂長とて居て看やの
おふとて此道小寄此車小便りとのりし結さるる今年
夏日のおまは心まきふたのもちのち抜深し事母子小
せられむとて。ち白雲運堂耳やとてしゆはあり

已々様本より山崎むすぶふとよそ師の共うと
告げお年自りひく親しく用ひたす此書肆
ふれおれぬとあはれはなほなほを
志はるるに

葛飾 一 龍井壺外

謹述

文化辛未秋

玉池雜藻 一

一 湯井壺外誌

此書玉池乃珠を拾ひ石を省くとも池をいへ今
安し申得己ふおひ共のゆきもあすかく藤壺
書集の序文扇ふ屋しを笑ひ月の風入は折ら信并
そこの兵平の光ふことの有とも光え又言れて好し
足るもはるよそ家がこ家とせおふ母をともせし物を
一 明和八年卯辰法彩あるとら申すはまう四月八日
八月九日伊勢参る人凡七百七十四百人餘ありと

あるは中書省永二年又生ひしにも有しと老翁男女
御乃安乃を撰すといひ新てあおけしことしと小瓶の注
まじり至夜しゆく群あそこと神慮は遠くけしを給ふの
有て渡ひし人あそ先年晋子の法所の遠絆を悔て

身乃秋や志子もあそ 神乃河山 其角

内言法樂之遠歌登句

山や志子も天照と日のとつともち 宗因

外言

さしり不皆押わひぬ沙途宮 桃青

二

西上人のけりけあそ小洞こむの初奇を暮ふあそりて

何乃木の茶ともかみ白ひの 全

一 厄歳之事海平感之書紀 治承二年二月廿二日宗感之御
大納言并大將とと表わつし今年二十三小つとまひまひ
重厄の怪ことせせしん 愚云今世少くハ世と十九を女の厄と
一 四拾二廿五を男の厄と云是二十三ハ敬十九ハ重苦の廿六
死の事とつるたとせ廿五の事ハ男の事と年少て是よりハ
返ふ事あるとせしとせせすの事なほむとほくめ

女子の洞なりとよめて起るを本授けり事かハ非るべし
一有氣世々衆 枉固如菴卷々言に張陽家の人氣有
餘不尚の年を有衆に虚耗属する年を世々氣とて
又田回耕等と云もの大股若徑と夫窮無暇人有暇俗
矣是暇俗といふ是より起ると祖芳老禪の話也ソ
有卦無卦の文字を用ふる非也とある云有氣を祝すハ
子の物七ツ條の事世風也ハ是を一句として

富貴七重ハ重も二けわぬ牡丹 素外

一舟二首を夢思ふるころ那も過さるのね又飛階者

皆上東門院住言乃浦一舟幸有ける侍りも馬多
ぢふふゆれたる神楽あふけひけあつた舟ふよむへし
お衆武部く宣言有るを清くも世へくおとる衆有る
何と舟娘ふよませたる越後を清くも世へくおとる
所前へけりのおとる衆へくお母のつらみむいふ早
わると五文をせしむるお武部少知あて夫ら神の山事ふ
あつとあいつふんねやとつらを院敷院つらとあつたも
のまじいつらとあつたをよと仰らるれふんかつらと
ろつとあつたつらとあつた

お早なる神のつらとあつた

とも波のふももをわらけりてををけり先法住のく
ちふ或しゆりうあまのついで下これものまらるる
小或の内侍と長しうけ時十二采りてま〜と
一花園た右南殿あやて杖織のかくとおふけはしりふ
當けま下格あふ人あれと仰りまらるる花人又位も
中て侍あ〜とふあめな〜は兼てあふむとま〜と
わ乃雲をよめと仰りまらるる後あはさ〜と青柳法と
けめの句とせ〜とを女房達物あ〜と只ひ〜とけ
あひ〜とを大官物をまらび〜とあや〜とや〜と仰

らま〜と〜はあ〜とまられハ ち柳乃〜と〜のあを
く〜と〜を〜て杖い織りやかくと〜と〜とけい春
或〜と〜と萩〜と〜と押か〜と〜と
一涼体首あけ活 元神の衣あ加刺合度のとらふ月折端と海
裏袖をけ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
句の扱ひ乃〜と〜と小連尻大あ番せ〜と〜と

一飲酒時之頃 此酒芳氣 遍滿天下 祭諸佛等

祭諸靈等 天福皆来 地福因滿 拾遺抄三出

一 大酒を飲む人其腹中あはれつるを虫に又尻をうらむれは其人多
酒を飲ふ道と白氏文集を引て出せる区書つるを思ふに
社中小大酒の士をて飯初も二杯三杯を飲ふ者あり日
碓研して嘔吐せしふて井より一寸もくうふてを思ふ平め
あるふと又よりて酒を飲ふ節と止まれば酒を吸
るやもるむ又外れ人の美態も大酒の若者より生
主人も言えければ何程のむあはれんと思ふ也

椽さためて研み次て香せし六粒を青じろ糸を飲つる
こも法を飲つるを思ふは修道の事其後の飲つるん
とを思ひてやめしと主人の物も如く思ふ也

常のわき年々もくもく酔て酒 素外

一物の味を減く思ふも思ふを思ふことと云は事 或印木
元日の屠蘇少起る公事 根原集 茶あとしていす梅せき
は少くも屠蘇を飲めぬ天の奉る也小兒と云てを小
とよむはくと思ふは事沈と云ふに小兒をの飯名鬼ら
わ名沙く思ふと云ふは小兒ををふと湯桶と云ふ

先年より黄の方小出て迄時死猪の近習も今日の黄
味も違ひ世と作らるるゆへふくらまは黄味のみと
下より調成致して黄味と申す所又屠穂小
よらら天上の鬼は清脂モの具を食ふは菓子鬼乃
る不在と云ふをいふ然る小鬼ニ及て鬼は字を以
鬼味とも書つる又一日食は事灰鬼一日をいへども
とては去法黄味の方安らけて近くも

一牛馬の牡丹餅は益益形之又疾の氣を去るは
黄粉をかけし皮をもて之を餅餅にもち申すもわら

灰粥餅の模化して又黒牡丹を以て牛の尻尾を牡
丹の火所を云火のさむかるを牡丹花小形容せしなり
又云南流季の通俗志に十月に於て菊を牡丹と續け
ゆは勿論今時を好む者これを所極せしむるは新井
氏の火所とあるも亦一説ありて亦作せし火所も用ひ
又百菴の句に くらを黄粉の身やをこす又
句小窓の斜日を ちよりの一まん牡丹をこりて 兼介
右の如く破工論してあるは句作もつらん也
一同書ふ或日あるての語先年あるを指せし物と

馬成お車小をえーういけをきいて腰中の毒を吐け
くく蛇咬く小をれを海小流き失ふると又その後他の客云
小兒てんし暖ふをれ時注けい小生親馬成を危下せり業味
おもと善にけれ小見注け小かちりさせと夜と撫さうて
痛じ不まふ不ぬらうれ愈て注をとめ持せりたの心と
況る本草ニ烏賊海蝶蛸 蝎カクセキ 螫イダシの疼痛を治すとわまとも毒
の能とのせ次よりてさうさうとわまとも

一河豚本草細目無毒とられ時珍食物本草ニ大毒なりと
んえうけ毒を治す注け也なり年け毒おけり注者海上

めて大毒なりぬをえりけ毒を治し小砂糖を下されを
素湯小立て用ひ小糖小味毛世との事是も右の書ニ載
り又南嶺子ニ鱧と河豚の文字のりつきて既小命を失を
とむとせを青砥の粉を水おき立てり月以本後世事を治せ
又市知已の中右の毒より大毒熱せり小除更ぬけさハ
医業及ひい海をぬらん胃け七丸程と道土間て腹を
治せりれ小水小熱毒さめて平生神不遂事を商人の物語
ゆえぞ一也右時珍況のやいれ大毒魚かて見うる小なるま
これ又忽小死せもの時わまハ世り人ゆめ食さくさうよ

つらとゆしけ同いふ云先年外橋田四末ぬとも綴をぬい食
すのちとて中々切平の女五人にりり毒をいひて喰くつらと
武時又これをおろふ女とて毒いよく毒あふれ我もいひて女
おろすゆえの毒よりり父母とも相果るひあにむとう生残して
いひせむまよるといひ死をもとめせぬかよとてこれをおろす
云りれい夫婦も孝人の涙をい合せ詞もい次誓し流涙して
大小恥おひて今煮く綴おもも跡に捨つとてせし事をせめて
そと満中をいれまてゆくといひ一人も泣きぬねと一統やめいと
是亦女も孝の徳をいんれお光も美言内いりて女も交り
ハ

一の今い他をも製しとてむる也

親い子乃いあふかきとてぬくゆけ 素介

おやもて早帳おあちり河豚嫌ひ

危ういとやぬくおんくゆい人の教

一當流の祖西山宗周排号ハ梅翁ハ保乃ハ浪花天満玄
乃ハ小偶居ハ一ゆめて乃今席よ

淵とあふんず人乃水や菊乃毒 宗周

正徳後明曆二年任へき地をもとめ向榮菴の成りし所
神やうけはけいふよりぬくのきくめ水 全

梅翁乃流傳を眺有去来二角等々賞譽世し事小を某
抄雜流集あり在り印行の集物ありんり其文におふ
魚の著者も引種を載し又許六り歴代滑稽傳に流の
癸句の古今ありとの梅翁あり 白毛河や無き別あり是所
後代ありとも是れとの事いひ出せし言作者をいとも是れ
又何をいへとも中の秋と云ふかとい未代不易なりて妙史云云又近年
故人法教ありんり秋人の陰翁六十一年餘の初已て折ふ物を
も少く一人也先年梅翁所を流乃自書をい世小我流流の
りいちら流乃を流乃書小流乃の恥しめらるる事いひあまうと
ん

今世乃流金もかくるい流もの事これ汗面せし

名もいふも世も事定れ梅翁翁 素介

一梅翁江ふりしり以餐けたるいりて善居町芝居人物
おりおりしりしり席茶也 子い梅翁とらり竹也と世
の五文字かりしれを流乃と添割をいりる流乃流
たや~~~~~五いまるらりしり休と流と五文字を
流乃と流乃の二種をいりて或此の抄流止けりといや
といふ乃の算ふ事も祇禱の癸流也といふを流小わけて流拾
造流保昌朝は舟いかありの流の流とらり流乃ありしり

あはれおのりもまたも同じ加友とよもの加弁を需む
よをよえいさう山のまへにうねる云南白丸ともは二舟
めさうるこし引直しあ

花見宿やえいさうく東叡山 加友

おおのま娘をほけむとて

おまこいむけくをよて車坂 梅翁

えいさう山の句は遊歌の道とよ厚く非諧歎下
以事宋仲 敬隨筆出

一宗因の紙の切しお 我亦原居不南山のまを友ほけく
廣くありて壺乃田くまをを杜素願こふぬ山五人十八

江

あもあひるあもあきをる云怪しと

連芳 老く来居未陰なうあひま紫糸 宗因

連歌あもしうくあまの山高風成ましくおんえん秋風う
秋しき口あし三吟をえて我をたトあふ古きうお許
やうくあひあさま下

一秋凡末三井氏尚流の作者あしる原くもして夏神と成

右八山丸ら園傍三梅三曙三 秋凡

一日小いく夏をさるる花とやさき月あ
つらふま白なる飯をすむ我の沙室が

け時分、秋風の、あはれはけやうな体もやに、天和の
未よると貞享、ふうの、え、福もあつてあはれ、貞の、か
風、河、際、風、折、と、成、雅、お、せ、ら、あ、る、い、よ、く、古、今、乃、書、を
て、て、変、化、を、も、明、ら、む、但、今、未、熟、の、祀、と、適、右、失、体、の
句、を、て、て、荒、と、給、ち、る、句、は、小、徳、の、又、張、小、ま、る、も、何、れ、を
後、の、川、の、事、を、予、う、人、申、免、志、の、趣、小、よ、う、う、う、う、
一字、餘、り、と、も、秋、風、の、所、代、の、句、法、か、の、他、の、和、舟、の、之、也、
他、例、あ、る、い、を、兼、風、折、抄、三、世、一、家、よ、う、と、能、く、し、り、秀、逸、法
中、ハ、子、細、道、と、い、は、く、と、毎、日、れ、の、あ、ら、と、い、ふ、又、ハ、雲、信、傳、也、
上

文字、傳、の、中、に、せ、る、や、う、か、解、さ、せ、ま、は、く、と、今、う、ん、系
と、は、と、あ、ら、と、い、は、く、は、は、ら、ま、う、て、け、は、は、く、あ、ら、と、い、は、
く、と、あ、ら、と、い、は、く、字、も、苦、く、と、次、忠、仁、と、舟、
よ、う、い、は、老、忠、志、と、い、は、く、は、は、ら、ま、う、て、け、は、は、く、あ、ら、と、い、は、
又、字、傳、の、中、に、せ、る、や、う、か、解、さ、せ、ま、は、く、と、今、う、ん、系
と、は、と、あ、ら、と、い、は、く、は、は、ら、ま、う、て、け、は、は、く、あ、ら、と、い、は、
一、鬼、夷、い、と、い、は、く、言、の、ま、た、ち、の、先、師、松、江、の、翁、と、雅、也、
物、志、翁、と、列、在、の、舍、小、出、て、ち、よ、と、見、ふ、ハ、近、三、も、遠、一、

中此山と云ふ小 腰小瓢をさけてあらくと附はるけ
ま六右野山小云く趣主故ある事やと師の智めおらひはふ
為感て 吳若野の巻乃をうとをうねとひてむさこたつ
さふたなご坊と云ふ古奇おまうとて付はる坑と為産小
この歌を作還て首はれはけ奇産は何ふあるやと云ら
まらるふと云ふしう美繁は又木身足人と云はれはやを執
事小のせらまらるふはれ師の心を解めかた偽をもて
勿評かとも信事を探したる科人にももたふ道は事
今又悲愛を信下略思云鬼貴偽と云ふは洋述てのガク漢
三

一 初一と云ふ中師小漢て不世有とも不世有(三)事は
一 同書小漢余右大信知は上ふら馬の事ゆかひ附う大江
千里う月えれかの奇は汝也云ふかへと首はれはまは
産拍あをいれむいて所産ふる乃系うを産るまひ
はると抄思云飛浩おも句の産拍子と云ふのと云ふと成下
先師茶瓶二つ文字解つこのを解く昔小む友らをも
系少ハ夫をもて考へらば産る又十間のころ場をの系平
七八百巻系まいる附もまへ又八九百の附もは(三)是を乳満は
まはる産る(三)まはる句の字教も云ふらこれハ格調ハ

こつとあつとたたと示はれはふさる事あらん

一 西の法皇御幼の時乃尔骨れあひれは新よま合はる事
のまれを牛ぬえ咎めは法師牛造と作しあぬは
まれの西の言修の者中くた積の者からあつたは
さつら十二のえとを一首に讀下し事あはれはと
年未さるて中いぬは積らもぬはとらぬはとらぬは
と九は法皇の名小よまれはまはれはとらぬはとらぬは
一 こそとせとくくの者秋残の意とてさる貴の方より己下
るるは秋井能事と有れは法皇よまらぬは

源三位 猪早太 頼政 兼 秋残味鶴小安よまらぬは

一 頼政立春の歌 けりけり妻ふけりけりけりけりけりけり
よハ雪の下も又貞室の句に恋の叶はる人おかしうて 亦解ぬ
雪や深谷の底らり又加賀の希因の句に 梅さけはめれ
おもおや谷のあもも先年 少とけよまのあもも
去年の雪けけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
一 炊室のひ葉の女はるといふ有るは名はあま
着乃葉のあつるこつとあつとたたと示はれはふさる事あらん
梅さけはめれ

内へ招へ入れ我いもといぬ乃花女を道に今れあはしき
と一處をてうと呼ぶ世をれあはしき書をつるとやせしう
那波の宗因大のあはしきるまひぬらひ花女句歌のうけしき
こあもつてえ結をれとあはしき例をうけわあうらふも
いぬもいぬとてあはしきの老人の句をあまやうと

葉乃香や蝶八はとあはしきことのはき 桃青

一桃青奥の細乃ふお玉の誰ををふえて受れ侍る杖一る満て
あはしき女と老るる男の物なとてあはしきをうけしき花女
宮中とていふ治て生ぬあはしきのとてあはしきを笑く藤入

印く川家小花女もあはしき秋と月 桃青

あはしきもいぬとてあはしき二旅世に花女の念とてあはしきとちのき
あはしき人あはしき花の物の呼ぶあはしき音かあはしき通くたあはしき
あはしき酒とてあはしき魚とてあはしき乃花女もあはしきあはしき
あはしきとてあはしきとちのきとてあはしきあはしきあはしき
あはしきあはしきあはしきあはしきあはしきあはしきあはしき
あはしきあはしきあはしきあはしきあはしきあはしきあはしき

一鶺鴒也、乃事古今著聞、揚州中納言成範配、あはしき
あはしきあはしきあはしきあはしきあはしきあはしきあはしき

中唐乃ららふむじをおもひて 重れふらにむじふ
かららねとに玉なきの因やゆじきとておしつらるを也事
せんて灯籠の原ふ五等りふ小松因府あるとあひけれあさ
を退くとそ灯籠の火乃かきつけ本乃はくそや文字をけら
てざりふかきてお筆は廉乃因さう入ておらまけを思ふは舟の
中いりあむ小所と云流まの化道とく世小所と流うと信へて
先成範の歌なる事い右著書集を以流とせはこれと晋子
の雑法集をもせしめく流は流階の流氏二としてこはあしこれ
用ひて古今流え乃祭句は流小よとてせは小所の事小も

とてつたつと時乃ららふもふあつとつあ道又公を流は流階
鶴と云い本亦乃む河をく次とて同中をくはむじ今
多けれも皆させる事あけれは集なとふ入流は流階
後一系院表日の事お上東門院表のそあつとつらるを
えて法流る入道 其のそやこつとをふくは日世の因乃おも
ぬゆくゑ上東門院に 異るはき世の光るもやかそ流
乃日くたぬもあつぬくらんか流よつとつぬをいふ
一大小信り事 述異記に流机の例「其身と云流大らと流流
在る時戲まふと我卿の歌小大事お来思書を持てけむじや

而也大尾をこれ聲をゆてまき小悪を批書を井筒小
して大乃以不繫く大強は不也批書のの勢小悪人筒を
弄して書を足来れ大勢をゆて書を求る不有也人首
を筒小令又大の勢はなく大出馳て落小師の後死せし時
批并る不也ひき勢小回ひて強し呼て黄耳塚とせ

一 晋乃大和申場生大を飼て甚也走わる目大沃乃迎お行てま
中小碓峠を折返時大起て其上風烈く大驚きわかれも生
ま不起次大沈生之夏を流く大おれを足ておも一坑ありま
川て身を流し生る大右乃まおれくかせふよひてまおれ

火言えつり生に海目よめ大乃お情ふとる火乃難小
戸惣これ一申をまきつ

一 清重実白も言大を遊遊何せのひらうり法飲も人目
赤糸清道小或日持の大出先おさるると又吼おるて法車より
ちりさせまへい此権をくもえ引苗めりさんともてい
さ戸やうある事あるんと喟明をばて占くせのひき見
君を呪阻まののを道小埋てん也と持の石を占ひ堀せ
つりけれ土器を二ッ合せ黄なる帛捻めて十文字お小かけ
あを異きえまの中おのものなくて朱砂とて一文字をま

つらとる是是堀川大信取光云の法を得て道摩法師
を備へ世とや事つらとるを是のた本國攝摩(近下され
けり大いよくの便くらせむいりるとあり

一冬列碧海郡西和田村大頭大尾の社天正年中領主宮藤
左馬五郎忠茂捕小蛇一樹の信小晴取世時自削の白大
蛇をくみて引小目を免せら又眠れ大蛇さうふるゆりよ
其跡をいりる獨りぬいて大の首をきれい飛て樹上の蛇蛇の
斑小く付忠茂是をえて大小蛇きき蛇蛇を殺し相取大の蛇蛇
を置取尾を埋て是也 此は小蛇一丈大蛇は吹以 素針

一小回系断魚回魚小飛名系為とて廣く知れ男の道に其
系小蛇を巻と事他小蛇えつらつる夜盜賊今何いぬを
其猫んつけとさう小啼さう死後の飛付るとせふ小回系小
警れ追く小起おらふ城ハ早く逃去つるまよりいふ未ら
又格別小忠世とせあふと大ハ性陽物ゆて何と
人を知らず又因縁有てや仔細と事又事本村内有
又と遠ハ猫ハ法教して年回く成てハ妖怪をあらむの
されと東為の猫のゆきと玉圓を知らぬ城を退退けを足て人
して教者の情をいふ會教ふも方途ハ是なり是は是時人

一 猿丸 祢子母 宇治拾遺に次作の玉小中さん知らずと申
神代に傳はれりやいふに、井さむ、猿丸が持て有るは、持の
祢子母の系、ふ必人の娘を生獲ふを、吾妻伝の持
好む者、こころに、ふ、ふ、猿丸を、從生獲を、世に申す
畧文、但猿丸と、猿丸事、又猫を、祢子母と、申す、但、申す、
祢子母と、まの略、一母と、ふ、祢子母の畧、申す、と、申す、
猿丸を、又、首、首、其、介、乃、抄、物、も、及、此、時、代、等、知、れ、次、時、代、明
方丈記に、云、近江、山、田、上、小、猿丸、を、又、曰、跡、有、之、と、云、又、丸、人、の、茶、行
丸、角、丸、と、云、是、は、祢子母、小、丸、の、事、也、大、丈、は、從、其、位、小、丸、也、時、小、丸、也、
六

其名を後ともしよと云又平家物語に猫間中納言光孝の
と、小、有、本、曾、友、出、舍、の、附、名、を、也、也、初、て、猫、皮、と、申、考、せ、ら
連、也、この、猫、皮、と、申、も、亦、謂、有、け、る、活、名、に、於、尋、ね、ん、也、
一、悉、く、傳、は、れ、た、妹、安、喜、尼、の、毛、と、強、盜、入、り、物、と、も、と、申、す、
此、れ、小、尼、之、紙、を、也、と、云、も、の、を、引、出、て、申、は、ら、る、小、妹、有、る、尼、の
も、と、小、尼、君、に、引、ら、る、り、走、り、申、す、見、け、れ、小、妹、の、絨、小、袖、一、ツ、丸
道、行、ら、る、を、尼、の、毛、持、て、申、は、れ、申、す、小、尼、の、毛、申、す、是、も
五、七、後、小、盜、人、我、も、の、ま、り、思、ひ、つ、く、免、い、ま、す、と、申、す、小、尼、持、て
お、け、は、ら、る、と、申、す、と、わ、る、小、尼、君、や、と、申、す、と、申、す、と、申、す、

ふ隊あり来らんとせんといひはまは盗人を三回と誓し棄て
たはりまはてらしく来りふりりとて来り物をも返さず
物をもとむ 盗泉とよめは涼し性らむ 糸舟
一者彼れも好く金失りたるを隣の腰居に盗こころといひ
はぎ有る雜物を搜し返せしるるふ甘毛のやうなを
以ておもむきわらむとまをこゝろてはいそがれ九は係
危れ他人を盗こきてはゆんと改む甘系あきふもはらね
ハ相論しこの中を檢非違収捕をあはらし腰居を不
便也いふはみさらしと極と作有けは火火説ひ取らるる
九

居るおらるをえてかすの才おれと相ひ討て盗て居るよふと
さうそ科ふりれらるとせむ云是は又よるとせとくは
なほ道りある庵のじふ竹細工の小に靴入を返すといつた
はようは見えは後掃除せ時額のじらより出たり極めて
荒城乃業成危うといひて鴨居乃上へ引たりといふは人
といひて又のこを入居るの灯を消をくおまはるはとくと
きまよき命物とて是をえはふは尾を波靴入を巻あつと履
お押あむを掲ぐは道り明りふ路き靴入をおし逃らせり
は智のこにある事ハ極居り谷おも物をとむと見え

又レ後武室の河にハ陶器小入ノ油を崩乃掌るハ
テヨリ尾の届くだけには己ヨク也々志こきのむと也

一袋草紙ニ元慶ハ大山乃別あは筑紫也杜鶴を誦也

我宿の垣根をよせやふらき次つれ乃里もあなうれを
テ後上洛乃附山崎迎へて下女の紅唄を唱之元慶是を以て
涙を拭かとも又良選歌とも云又後成乃乃哥ニ

世乃月ハヨキ事不替る歌もれやあひまのれとて其まはせ
け音を流のそつとも乃神等よつこひはまのあまふくつらる
外とていじら悦ひまををむ廿六水縁信は中を守てら

やと我よる心 安たひはれにられはらき次つれハ初音
のららうそまの音を琵琶法師とも小物とらせ安かこ
ちて風をせらまの附のふかあはまきんとなむいひらる又
敷お入道も毛を浦山一々あひむ物ハそらせん我
よじ音を同くらもかうらとせあうこせて世のふ
笑とれらるる也 蛙等こころむむし誰か 素外

一極麩の盤柱禪師ハ元祿の辰乃ふを法徳世ふゆえをく
よめ信仰乃俗騎一遷化後勅々大法正眼ハ師と
溢る禪師佛道吾道す此乃便ハ次撰ハ世一首をよむ今

平好し世おれと家安小其一二を裁也

生走東道いあし正ハ何もおもくあふ乃る所

希妙も只候ハツもあはれあはれ無う時一き

悪をきくハ道やとあふ娘ハをいづくやもの

又飛匂有 草よ木よ汝お志めらけ乃はの

一丹波栢原の於右田ハ此を前をよく又飛階小名をあらう

いは猶むあ葉もらすふは花乃心

毛をやはさくやあれうき世もの

後小右祥師の才子と改真閑祥尼と号す

一伊勢音頭むと乃作者ハ大伴飛階師少く奈端時の名もさ

奈向ゆや虫おせし之中栢原ハ作多ハ在虚のまふ奈しと春せ

天の河といふハ加賀の加保向句ニ是ハ奈代と同附代乃女およき

句あり世古市中の地産ハ多中ハ勿論乃も客はまハ傀儡

寄うハひつれて踊る今も喜ばる者ある作者あるや知汝

一梅路けりハ伊勢川濟とよ妙乃魚商人ゆり月々を荷の事

市中おむさく或日皮くしらを高ふよ土地の風俗として辨おけり

まは買人何れとらやと問ふ 亦乃中ハ二又五百又ふまきふまき

筋あり見始作を以答えまはやの也次才ハ人引いて遊者と

色は古老乃毛の守武乃菴を申す世に神風彼を
奇作妙句其は南北の普く知らずむとせかたふ旅世こそ
合はせはしめてのちまふ枝口の作やる本梅乃の一唯ふ
てはまはいつちる句をやしの出まるとは身を吞て得たうふ
帯入りきもなきそいつひけととたふ字をわけて先ッあう
かきき 二つむせとかの体こつはくしてあは 梅路
又後合の内お句刺毛はわれと嘆きとて長とらふ
かりやあ捨さいものを盗まのさる
句案しれを屈せはつらうとて志をも作る然し但け五文字

其ははき秋は河といひしを春に合は乃飛語ニツかまうれ
かふら梅乃を信とせの風潮と云又毛は経緯で後涼城集

酒のめと十日の菊毛淋しうあ

巻はさばうをあうあをわあ 梅路

天物おの寺中跡くひおとされて

仗者一通王法整くうふ

病毛のかううの灯つきえてる

兼徳へつらうあ誰いまで見く

は作者右ふ云ぬるれい文字は事お味も色しうとも自然あ得る

葛菴此稿の修訂時坡没後洛の百川 漢画人也此稿ハ支考ノ進
口後ハ世風ト云

先不遠ハ發句ハ加賀小菴ト云希岡小学ハ附句ハ伊勢小菴ト
梅流を呼と云但山中亦在ハ此ハ却岡ト云後沙茶ハ吸菴庵
をひまの風神を授じて涼徳と改む是己ハ壯年の以乃師
也備子中ハ画師ト云下此稿を急々高貴の命を蒙る時
亦赴き山水の法を費海流ハ得花鳥乃意を然悲亦取
中道亦も熟せると云取幼此坡つゝは時呼方乃發句

野坡

竹小菴ト云於野早記ト云
一我ヤ桂男
からるのうはら男や不とまき次

苗

昼乃故の羨や二筋い毛乃蔓 葛菴

むらゝ小菴多小カキハ山茶哉

加州金澤小菴ト云此是亦同ト云

春乃川や流り乃許の志津と云 希岡

若月や風と云見えそ是はまき

浦乃云千鳥と飛次明小けと 却岡

梅をかくぬまは月日やさし白

沙茶の庵歎と云を花と云解と云

ささふと云はるるとお毛一初と云 涼徳

あつとをき直のつ人ほひのきり池を画をもてせよ也

望らけてとらと涼し袋乃風は声

素舟

先通つては後者を神田の病し蓋ゆれを和命あ及民
あふらて池乃唱えを止め古事記あきて片歌の名目
を起し是亦一節をあせ又云涼体性旅を好いの僻をよ
てはと来も法ふ申秋し路小登るに時やとれき方を尾
秋つきて有るきは世詞と下れ風流の上乃規模は遠く後後と毒
飯法を思ふ清くんのを中送る我信をも又次て海鳥言
中らなれは固辞せと右の法は今何事小信は也 一三卷

甚

凡人仕奉の時ハ敬事といふと涼し極暑を苦しむ
ものれ今おはも老を近き小及びく苦樂大よ反し
冬と事と極不慮免し今時昔と鐘の聲は不徒及を
公の山やふけて鏡おの鶴乃音の早きを候ふよて
風不起出く前裁のこひくき本系を也一區ハ風乃
るあよとを起る小産しやを熱を凌く相夕影をわい
或日ハ田圃の眺めある亭小招られ又ハ何思不誘ふれ出
風系小常ををかくまかくも思不候小老を常ふ
物らららららと夏の題をまらけて登白も爰小日し

。白瓜。胡瓜。冬瓜 今江戶までかも瓜といふ。けし瓜

は外瓜数種あり今も扱ふの事を出せ

○茄子 花 薄名 崑崙瓜 鴨焼 辛茹の旨

第三 **美那津教川** ○涼し。露凍し。納涼。同取

○川狩。鱒。四手網。持網

○形代。楳物。川社 月又ささくみさるる合也

今も加賀のささくみさるる合也 ○何らふこ枝 これは後にとれまも其旨の内地

。夕枝。亦枝。名我の枝 邪神をとりひかこむ

。ととひ之枝。菱ぬき。芽輪。麻叶菜流

誹諧奈都美津起 一之卷

卯月乃本草

卯花

卯花の山嶽や古も浪世 錦車

はくらくら續くや雪乃花 卯木

卯花をいじく起の目小窓 冬央

卯乃花や淡き花 魚幸

うのふやまの垣根と咲か 文賀女

卯花を垣ふさしく見 升末

卯花を乃いふくふーや清き垣
おろ木のうけとや花のうい垣
卯の花や何うもま乃畑境
卯の花や徑ふとー徳も何と
卯花を人おろ下戸といふも
うのむしやぬめく以子も乃
卯花を解る花と名る夜ハ穉
卯乃花や青葉まー其のまぬ
卯乃花を雪と花をやむく雀

雀
雀
時磨
如水
理外
左人
魚榮
魚龍
吳龜

鶉啼や卯の花垣乃とやうく
うの花や表を思ふ非木笛
うけきり卯の花をー雨もよ
卯花をやうくち垣も花さけ
卯乃花のほろをや垣のうち
故くひも卯の花乃ゆき鳥と
卯の花乃花さけ也梅雨近
う乃花やまぬぬぬ老う衣
う花を本花るる月乃色

涼山
蒼削
素玉
素徳
素隣
霞外
其葉
素翠
玉翠

卯の星やきみかると日一時のり
 うた星やまゝい咲はく如青月夜
 う乃星や細虫のいろの程さそと
 暗き松の地乃志をうやさう川木
 定信むやうりまはねむも垣終
 うのこゝろや山よふさこのちた時節
 卯の星や月なきもあもつて
 卯の星花子志く如浪よか垣根か
 うの舞や卯月よさきよよとふたさ

仙鬼 玉英 一秀 素蓬 静雨 輝月 些山女 連車 春裡 四

混合

卯の星のきや日あけの積は—矢
 多條—卯の星月お世る—も
 う乃く星や志はひ車と園の方
 卯の星や枸杞やうらたと方囀
 卯の星や雨よすよむも忍び
 卯の星やさうり—干てふ里乃垣
 卯乃星や校道は温泉の箱根哉
 名知ま香鼻山もかくや星うつき

素行 言外 五蝶 百我 汁漬 女 沾茶 素外 寛之

卯の花やまゝいけ言りかゝる
 園のおや卯のおもて木垣乃恵
 皇静ふうおまゝや間の者
 卯おまはさ折をこゝむ為き垣
 うのゑを磨や貢くおのはしめ
 卯おまのちゝやもよゝ乃のまゝ
 卯は花のまゝや月の夜なごも
 う乃ゝ外や佛のまゝ葉の産湯
 こゝらしや岸のまゝおま乾清き

候得共
 奇峰
 素妝
 都奴雅
 花外
 花丸
 素轉
 素周
 急流
 五

宇津花の垣やからけの杉馬記
 うおまや歌うらゝう流道まゝ
 卯の花やまゝ田植女もまゝ白き
 う乃おまや山師無邊を月まゝ
 うおまは常のまゝむけや道祖神
 卯の花や卯月のおまゝのふもと
 卯のまゝや人も伸衣の遊詣
 卯おまや城の葉乃をうら垣
 うのふやまゝ小橋ねるまゝとま

雨簾
 意外
 香
 仙里
 舊香
 素綾
 花慶
 米粒
 烏孝

外のおもや月小きりよふ田舎道
 うねをたや花も白雲あらぬ里
 卯乃花や妹の垣根小きうしし句
 卯花よかや長百姓乃外へ向へ
 うのをれあま記おししやおね山
 くも跡の烟乃境やはかう川記
 月の光さるる 若規 花やまなうら木
 卯花ぞや誰いそけともまら雨き
 うのをやまきさのおを皆を身
 壺外 素粒 白英 社來 義粒 木英 若規 雀帝 調布 在泉 六

う乃むやゆきの垣種よ蛇の夢
 卯の花乃まきやうくひを谷らら
 千朝 辰花 蘭波

牡丹

富貴を屋を園くはく牡丹外
 星をアうらおのまはれし牡丹
 花もも花形も豊乃牡丹外
 富貴丹も奢らぬさ戸や牡丹
 直添とくやな牡丹小籠袴
 錦車 錦交 冬兵 富幸 素鷹

唐織小片くや能ある庭牡丹 九人
 牡丹よハむくく起幕や樹を庭 吳龍
 清きくふくゆく起茶や白牡丹 涼山
 ハ重牡丹露のふ起ふ又ふ起ふ魚 蒼例
 見地もねふくく河利花をむ 亀栄
 福やくふくくや牡丹乃くふの笑 亀龍
 むくむくか秋の中れ獅子も玉 霞外
 牡丹今はくくや郭憲く字ハ度 其業
 返社を牡丹小招く菊はく利 素曉
 七

大粒かきやむむの雨降子 玉翠
 白牡丹六の庭きく月おふか 一秀
 大白徳牡丹や目くく虫をさつ 素彦
 夕日達き牡丹や茶乃不老門 輝月
 室のくも奢らぬ茶や白牡丹 些山女
 荷あくく牡丹と室ともくきを 連車
 牡丹外秀もむけく媽乃花の勇 春裡
 廿日草
 見尔人も未はや十日の廿日草 升来

廿日之月春むや振る其の日敷
照る燈る小宵周ハなしと何う草

素玉

仙鬼

深見草

もふ香子すくふやも婦々叶

文智女

鑽草

風いもの此小又さけち終ひくは

玉英

さ記小けそ志を燈ふうらひくま

静雨

名取草

いほやふ治世やも武の名とり叶

時磨

奇花珠志るふや富貴の名る草

素徳

富貴草

邯鄲乃る多をや蝶も富貴くは

雀姫女

志むらの早ふふ厚子一富貴草

如水

田楽くはさむむなま〜んあ〜草

理外

花玉

植一癖もあまも南条北志の玉

素翠

混合

ほ〜あ〜い〜あ人のさ〜も十九丹

寛之

大兵小作くや牡丹を系乃異
 桂くえしし令一外の比小牡丹
 乃新しと庭もめてぬき牡丹
 産あ出来く新も恨老も産牡丹
 さくや牡丹風きておまた系一編
 夏あても其の衣級やく系牡丹
 系壇出佳し寺も福地の牡丹か
 牡丹かれや系むらふきく雨の音
 けむむか作申しうな係系のさ戸
 五蝶
 五

急と字のめや系を務らぬ牡丹か
 福耳のちまや牡丹のあくかも
 牡丹今や蒼むるもくら乃珠の形
 似舞も似むいりも系牡丹う形
 咲けし大腹中ふとぬやむ
 あくもも上又ぬ花の牡丹か
 巖石ふまけぬ牡丹けきりか
 獅子口ふいけくも又系牡丹か
 世くくろ小賣あきぬ系牡丹
 龜流
 秋策
 在泉
 蘭破
 素登
 千朝
 世義
 為有
 百我

芳きまてりし花もせは牡丹
 往つ馬の牡丹不戯る蝶婦より
 牡丹うねる花野々々
 公時う笑顔もかくや紅かへん
 玉なすくは花を園乃を牡丹
 ある中ふ花乃ふ下て白牡丹
 柳子を飼てえぬ牡丹のまじり
 牡丹いけり由所の多も稀小咲
 在牡丹かの白う糸の猫もう那
 馬孝
 金馬
 都奴雅
 逸外
 花丸
 雙柳
 壽暎
 花慶
 花外
 子

酌意をいかに洋の牡丹う形
 紫がまきふらあけく牡丹
 往牡丹花よ花籍ものふし
 空を地よりあつて咲や牡丹
 花もすあよ花もむ牡丹の掌
 一つ人の花もよ牡丹のな
 花のう蝶おとけう花はむ分
 ね見とりの花は花や花を人
 原富
 九原
 壺外
 規外
 素粒
 義粒
 田社
 本英
 素蓮

琴^ノ唄^ノも牡丹乃^乃當^當き自在
 臨^臨猫^猫のいよく^く^く^く白^白むむ
 夏^夏来^来る^る一^一舞^舞當^當千^千牡丹^{牡丹}外
 五^五紫^紫け牡丹^{牡丹}も^も一^一狗^狗
 筆^筆太^太也^也乃^乃牡丹^{牡丹}乃^乃流^流の^の札
 五^五日^日の^の風^風十^十夕^夕牡丹^{牡丹}乃^乃法^法や^や廿^廿日^日草^草
 角^角力^力なら^ら十^十夕^夕牡丹^{牡丹}乃^乃法^法の^の札
 伊^伊の^のか^かく^く牡丹^{牡丹}乃^乃法^法の^の札
 乃^乃の^の笑^笑む^む牡丹^{牡丹}乃^乃法^法の^の札
 雀^雀師^師
 五^五計^計
 素^素外^外
 英^英球^球
 常^常舟^舟中^中
 素^素外^外
 宜^宜秀^秀
 意^意外^外
 女^女沾^沾紫^紫
 素^素外^外
 土^土

客^客繁^繁一^一後^後の^の十^十夕^夕乃^乃婦^婦乃^乃草^草
 蝶^蝶と^と牡丹^{牡丹}乃^乃法^法の^の札
 け^け牡丹^{牡丹}乃^乃法^法の^の札
 純^純牡丹^{牡丹}乃^乃法^法の^の札
 和^和牡丹^{牡丹}乃^乃法^法の^の札
 五^五日^日の^の風^風十^十夕^夕牡丹^{牡丹}乃^乃法^法の^の札
 素^素外^外
 規^規外^外
 白^白英^英
 有^有市^市
 從^從一^一

稚子もむさや極まはる利平 汁
 人なまらぬや寛活る各九草 素外
 目小ぬれく耳舟も果被富き草 僕得兵
 更上庭の程ふふやふふ草之依 社時雨
 世と庭も底もももも富貴草 言外
 白小紅子舟し紅きふつ富き草 曉柝
 舟しふもや笑うり草の富き草 賀重
 舟しふもや笑うり草の富き草 蘭児
 舟しふもや笑うり草の富き草 昌舟
 舟しふもや笑うり草の富き草 十三

舟しふもや笑うり草の富き草 夷逸
 舟しふもや笑うり草の富き草 素周
 舟しふもや笑うり草の富き草 素外
 舟しふもや笑うり草の富き草 常中
 舟しふもや笑うり草の富き草 九柝
 舟しふもや笑うり草の富き草 調布
 舟しふもや笑うり草の富き草 素外

杜若
 辨天の手隈花池乃かき月々
 錦車

花石の姿亦有いしなきはたぬ
 鏡久女
 鏡より紫白位より利杜より
 冬典
 泥中亦思たいろやうあつても
 龜辛
 おのひららびくもはたの杜若
 文賀女
 濁りてしるももり杜若
 升来
 泥中の玉や根亦持りたれども
 雀媛
 咲くえや磐山裾濃くきはも
 素磨
 折事ハ用もぬいろや葉子花
 如水
 影を繪く用も小ねやかさつと
 天人
 三

花を思ふ花のたらやの如く
 龜宗
 花葉も秋と分らぬやかきつは
 龜龍
 花をくらもぬれと稀き葉子花
 吳龍
 わらふ花むなしくもやかきつは
 涼山
 田舟うけてもふもふくや杜若
 蒼剛
 杜若暎やまぬけ乃かきつは
 其葉
 母く片ふも目ふもくし杜若
 仙息
 かまといふもも旬也如起陣は
 玉英
 梅も旬いふ杜若ハかきつは
 一秀

甲くももきと春をいかにかきんも
其甚をふふ履さすいおたつはこ
のきばさし西工もきふ限を何れ
似るもさつわ先長員を杜若
中ふに戸を都乃きやかきつを
らふらな系のみふもきいはぬ

顔吉花

多し後とぬかともあふせぬ花
こころもあはふらふい息を

素蓮

輝月

些山女

連車

春裡

静雨

理外

素玉

苗

八橋や在立乃君もかふよを
いほ風情とんぶ形なり顔吉花

混合

きおふアて馬はひーのかた法を
夏解乃空より見ふや等んり
燕子花中ふあらなや海乃り友
道く笑せゆふや土産の杜若
柳起きき風のまの男のきい
時た山や夏日池小佳気於遠多

霞外

素翠

奇峰

雨簾

素轉

千未

逸外

素外

蔓草のむちうねもかきらう
 ちむふる足跡の跡ら利の義は
 けくや濃く江戸のふきも杜若
 年月の古池清一 嘉永初は
 かきけいもさくや世の雨乃池
 由くものたるふらや杜若
 殺生も林あり乃れやかきらう
 ありけしはふ一 疎るん
 折る川軽々 時くふかきらう
 宣秀 金馬 賀重 素久 有市 五柳 素笈 社来 田社

如くはらうとせ 沼たうらな
 一二マん花もさくめさの池
 杜若さくや世へ出へむ一 杭
 多ふもく魚も躍る 杜若
 柵も土橋もえいけのきき
 庭小あつハハハハ かけむ杜若
 日ハいまも朝むさ紀の燕子花
 かきけいもさくや世の池之坊
 杜若さくや世の人を誘ふ
 五計 英珠 篠富 秋策 為有 寺溟 素登 仙里 尤原

かなんをさききりては花をらし
 可なりけしきも輪も不笑ふは紫
 江戸自慢さききりては花
 むしきねと江戸小のさききりては花
 業平のむしきねとさききりては花
 志の葉をねとさききりては花
 紫の葉の浅や池の月のらけ
 紫の葉の浅や池の月のらけ
 むしきねと江戸小のさききりては花

右外
 昌舟
 素行
 社時雨
 春瓜
 遠願
 素塵
 夷逸
 従一
 六

外らり守宮おまももかほも
 宗満の何れもや何れもや
 追加混雑
 素外
 世義

うねをや入るもさきの月お
 入るもさきの月お
 うねをや入るもさきの月お

翠毒

獅子鼻の僕やさききりては牡丹守
 うねをや入るもさきの月お
 素北

紅白乃多目多川や富き野 藩山

杜より温泉や涌山小川のぬ沼

鬼費独言小言とて客ららばと去一の今年

其室はろむを月夜申記をとも 素外

曰書小你兄弟かこころの小言くーと

今屏法極彩家や市く牡丹

又曰出小杜を渡せハ依じまきと増うを

見せハハ後勃く流ねや新よ花

